

映画化された英米文学 24 そのさわりを読む

行方 昭夫
河島 弘美

編著

TSURUMI SHOTEN

Credits:

RAIN by William Somerset Maugham
Copyright©1921 by William Somerset Maugham
English language reprint rights arranged with
United Agents Limited, London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

A PASSAGE TO INDIA by E. M. Forster
Copyright©1924 by E. M. Forster
English language reprint rights arranged with
The Society of Authors, London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

A FAREWELL TO ARMS by Ernest Hemingway
Copyright© 1929 by Ernest Hemingway
Used by permission of Hemingway Foreign Rights Trust
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

THE GRAPES OF WRATH by John Steinbeck
Copyright© 1939 by John Steinbeck, renewed 1967 by
John Steinbeck
Used by permission of McIntosh and Otis, Inc.
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

はしがき

『映画化された英米文学 24 そのさわりを読む』は、欲張った本です。映画、英米文学の名作、英米文学史、名作アンソロジー、英文解釈、英文法、翻訳のいずれかに関心のある人なら、誰にでも役立つように配慮してあります。映画化されている英米文学の代表作から、英米それぞれ1ダースを厳選し、各作品について、作家作品の紹介、「さわり」の原文、それを読むための丁寧な注釈、さらに英文法ガイドを巻末に用意しました。

作家作品の紹介では、作家と作品の特色とあらすじ、及び映画の解説など、多くの情報を圧縮して簡潔に述べました。

一作につき500語ほどの「さわり」は、原作の英語の見本となる有名な箇所の中から、読んで面白く、かつ語彙や構文の面から比較的平易なものを選びました。注釈には、単語や熟語の意味のほか、一般に英語を読むときにも応用がきくように、仮定法や話法など英文法の説明をしました。それだけでなく、必要に応じて文章の隠された意味合いにも言及しています。巻末の英文法ガイドでは、基礎的な知識だけでなく、コンテキスト、描出話法など、中級以上の英文理解に不可欠の解説も加えてあります。注釈の中で、[英文法ガイド6-V-2] 参照、という形で注意を喚起し、具体的な用例によって理解が深まるようにしました。

本書の題名になっている、文学作品の映画化について、皆さんはどう思われますか？ 映画を見て気に入って原作を読む、という場合もあれば、好きな作品が映画化されたので見に行く、という場合もありますね。以前は英米文学の映画化の情報が入ると、翻訳の出版社は多くの読者を見込んで本を大增刷したものでした。今は書物を読む人が少なくなりましたが、それでも大作映画が公開されれば、書店には原作の翻訳が並びます。

愛読書が原作となっている映画を見た場合、どうしても満足できない人が多いようです。愛読書であればあるほど、登場人物について自分なりのイメージがあるため、俳優がそれに及ばないことが多いのです。自分が一番好きな場面が無いことさえあります。読むのに数日以上かかる原作に対

して、映画は2時間前後で鑑賞できるように作られますから、それも仕方ないのです。でも時には、僅か2時間で原作のエッセンスを見事な映像で見せてくれる映画に出会って感激することもあります。

映画化には、原作に忠実なもの、原作をヒントにするだけで原作との関係が希薄なものがあります。原作の舞台は昔なのに、映画では背景が20世紀という場合もあります。本書で取り上げた原作は有名なものばかりなので、映画化される機会が多く、複数の映画の中から自分の好みのものを選ぶことが可能です。いずれの場合も、映画と文学はジャンルが違うのですから、原作との違いにあまり神経質にならず、できるだけ長所を見つめる寛大さも大切ではないでしょうか。なお、原作に忠実であることを尊重する人には、BBC制作の連続テレビドラマが好まれるでしょう。

英文をじっくりと読むことは、以前より軽視されていますが、日本人の英語学習の中心であるべきだと私もは考えています。表面だけを撫でているような読み方では、退屈なのは確かです。本書の注釈を利用して英文を丁寧に読み、作者の意味するところを正確に理解すれば、英文読解の本当の面白さが実感できます。

英語は日本語から遠く離れた言語です。英文法を知らずに、英語は理解できません。「さわり」の英文の理解に英文法がいかに有用であるか、多くの事例に接して実感して下さい。

イギリス文学は行方が、アメリカ文学は河島が担当しましたが、『ジェイン・エア』と『嵐が丘』は河島が、『アッシャー家の崩壊』と『緋文字』は行方が担当しました。両者でそれぞれの原稿を交換してチェックしあい、注釈の正確さに慎重を期しました。

なお引用の原文は主にペンギン版を使用し、各引用文の末尾に章と頁を記してあります。ペンギン版以外の場合には、その旨記してあります。

本書がたくさんの方々々に様々な目的で愛用されるよう念じてやみません。

2015年10月

行方 昭夫 河島 弘美

CONTENTS

はしがき

イギリス文学編

1. **Romeo and Juliet** by William Shakespeare 3
『ロミオとジュリエット』 ウィリアム・シェイクスピア
2. **Gulliver's Travels** by Jonathan Swift 8
『ガリバー旅行記』 ジョナサン・スウィフト
3. **Pride and Prejudice** by Jane Austen 13
『高慢と偏見』 ジェイン・オースティン
4. **Jane Eyre** by Charlotte Brontë 18
『ジェイン・エア』 シャーロット・ブロンテ
5. **Wuthering Heights** by Emily Brontë 23
『嵐が丘』 エミリー・ブロンテ
6. **Great Expectations** by Charles Dickens 28
『大いなる遺産』 チャールズ・ディケンズ
7. **Tess of the d'Urbervilles** by Thomas Hardy 32
『ダーバーヴィル家のテス』 トマス・ハーディー
8. **“A Scandal in Bohemia”** by Conan Doyle 37
from *The Adventures of Sherlock Holmes*
『ボヘミアの醜聞』（『シャーロック・ホームズの冒険』より）コナン・ドイル
9. **Pygmalion** by George Bernard Shaw 42
『ピグマリオン（マイ・フェア・レディ）』 ジョージ・バーナード・ショー
10. **Rain** by William Somerset Maugham 46
『雨』 サマセット・モーム
11. **A Passage to India** by E. M. Forster 51
『インドへの道』 E. M. フォースター
12. **Lady Chatterley's Lover** by D. H. Lawrence 56
『チャタレイ夫人の恋人』 D. H. ロレンス

アメリカ文学編

1. **The Last of the Mohicans** by James Fenimore Cooper 63
『モヒカン族の最後』 ジェイムズ・フェニモア・クーパー
 2. **The Fall of the House of Usher** by Edgar Allan Poe 68
『アッシャー家の崩壊』 エドガー・アラン・ポオ
 3. **The Scarlet Letter** by Nathaniel Hawthorne 73
『緋文字』 ナサニエル・ホーソン
 4. **Moby Dick: or The Whale** by Herman Melville 78
『白鯨』 ハーマン・メルヴィル
 5. **Little Women** by Louisa May Alcott 82
『若草物語』 ルイザ・メイ・オルコット
 6. **Washington Square** by Henry James 86
『ワシントン・スクエア (女相続人)』 ヘンリー・ジェイムズ
 7. **Adventures of Huckleberry Finn** by Mark Twain 90
『ハックルベリー・フィンの冒険』 マーク・トウェイン
 8. **Sister Carrie** by Theodore Dreiser 95
『シスター・キャリー (黄昏)』 セオドア・ドライサー
 9. **The Great Gatsby** by F. Scott Fitzgerald 100
『グレート・ギャツビー』 F. スコット・フィッツジェラルド
 10. **A Farewell to Arms** by Ernest Hemingway 104
『武器よさらば』 アーネスト・ヘミングウェイ
 11. **Gone with the Wind** by Margaret Mitchell 109
『風と共に去りぬ』 マーガレット・ミッチェル
 12. **The Grapes of Wrath** by John Steinbeck 113
『怒りの^{ぶどう}葡萄』 ジョン・スタインベック
- 英文法ガイド 117

Part 1

イギリス文学編

1. 『ロミオとジュリエット』

Romeo and Juliet

(1595?)

by

William Shakespeare

ウィリアム・シェイクスピア William Shakespeare (1564–1616)。世界中でもっとも広く知られた劇作家です。裕福だった父は、ウィリアムの少年時代に失脚し、彼は小学校より上の学校教育を受けていません。18歳の時、8歳上の女性と結婚、6か月後に長女が、さらに翌々年には双子が生まれました。まもなく単身で上京し劇団に入り、作家として修業したようです。28歳の時に評判の新進劇作家としてロンドンの劇場に登場しました。次第に、独自の境地に達し、20年ほどの間に37の劇を世に送ります。1611年ごろ故郷に引き上げ数年後死亡。創作活動は、一期(1590–95)の習作時代には史劇『リチャード三世』、喜劇『恋の骨折り損』、悲劇『ロミオとジュリエット』他があります。二期(1596–1600)は、円熟した喜劇の多い時代で、『夏の夜の夢』、『ヴェニスの商人』、『十二夜』などの喜劇、『ヘンリー四世』などの史劇、『ジュリアス・シーザー』などの悲劇他があります。三期(1601–09)の悲劇時代は『ハムレット』、『オセロー』、『マクベス』、『リア王』他です。四期(1610–12)はロマンス劇時代で『テンペスト』他です。

モンタギュー家のロメオは反目するキャプレット家の舞踏会でジュリエットと出会い、双方強い愛情を覚えます。乳母と修道僧の計らいで結婚。ところがロメオはジュリエットの従兄と喧嘩して殺害し、追放を命じられます。最初で最後の夜を過ごした後、夫は去り、青年貴族との結婚を迫られた妻は、修道僧の指示で、仮死をもたらす秘薬を婚礼の前夜に飲みます。事情を知らせる手紙がロメオに届かず、妻の死を聞いて、墓所に急行、妻の横で服毒自殺します。目を覚ました妻も夫の後を追います。大公は、この悲劇を契機に和解を命じ両家長も応じます。若い恋の美しさを抒情性豊かに歌い上げる感動的な悲劇です。

オリヴィア・ハッサーが演じるジュリエットは、甘美な音楽もあって、多くの映画観客を魅了しました。

William Shakespeare

(1) 彼がモンタギュー家の長男と知り、ジュリエットはバルコニーで虚空に向かって嘆きます。

JULIET O Romeo, Romeo! wherefore art thou Romeo?

Deny thy father and refuse thy name;

Or, if thou wilt not, be but sworn my love,

And I'll no longer be a Capulet.

ROMEO [Aside] Shall I hear more, or shall I speak at this? 5

JULIET 'Tis but thy name that is my enemy;

Thou art thyself, though not a Montague.

What's Montague? it is nor hand, nor foot,

Nor arm, nor face, nor any other part

Belonging to a man. O, be some other name! 10

Notes ●●●●●

- 1 **Wherefore art thou** = Why are you.
- 2 **Deny thy father** thy = your. 父との縁を絶つというのはモンタギュー家から出るということです。
- 3 **If thou wilt not, be but sworn my love** 「あなたがそうしたくないなら、私への愛を誓いなさい」
be but sworn my love = be only my sworn love. 「ただ私への愛を誓った人になりなさい」が直訳。
- 4 **And I'll no longer be a Capulet** 「そうすれば、私はもうキャピュレット家の一員をやめます」
- 5 **aside** 傍白。演劇で、観客には聞こえるが相手役には聞こえない想定となっているせりふ。
- 6 **'Tis but thy name that is my enemy** 「私の敵なのはあなたの名前のみ」
- 7 **Thou art thyself** 「あなたはあなた自身よ」

What's in a name? that which we call a rose
By any other name would smell as sweet;
So Romeo would, were he not Romeo call'd,
Retain that dear perfection which he owes
Without that title. Romeo, doff thy name,
And for that name which is no part of thee
Take all myself.

15

ROMEO I take thee at thy word:
Call me but love, and I'll be new baptized;
Henceforth I never will be Romeo. (II-2)

20

Notes ●●●●●

- 12 **By any other name would smell as sweet** 「他の名前で呼んだとしても、同じくいい香りがするでしょう」 仮定法。[英文法ガイド 9-IV-3] 参照。
- 13 **were he not Romeo call'd** 「彼がロミオと呼ばれなくても」 上と同じ仮定法。
- 14 **Retain that dear perfection** 「あの貴重な完璧さを保つでしょう」 would に続きます。
- 15 **that title** ロミオという名前の肩書。
doff 「捨てる」
- 16- **For that name ... Take all myself** 「名前の代わりに私の全てを受け入れて」
- 18 **I take thee at thy word** 「おっしゃるようになんたを受けいれます」
- 19 **Call me but love, and I'll be new baptized** 「愛人と呼んでくえさえすれば、新しい名前を授かったことになる」
new = newly.
- 20 **Henceforth I never will be Romeo** 「今後は僕はもうロミオではありません」

William Shakespeare

(2) 最初で最後の夫婦としての夜をすごした^{きぬぎぬ}後朝の別れの場面です。

JULIET Wilt thou be gone? it is not yet near day:

It was the nightingale, and not the lark,
That pierced the fearful hollow of thine ear;
Nightly she sings on yon pomegranate-tree:
Believe me, love, it was the nightingale.

5

ROMEO It was the lark, the herald of the morn,

No nightingale: look, love, what envious streaks
Do lace the severing clouds in yonder east:
Night's candles are burnt out, and jocund day
Stands tiptoe on the misty mountain tops.
I must be gone and live, or stay and die. (III-5)

10

Notes ●●●●●

- 1 **Wilt thou be gone?** 「行ってしまうの」
it is not yet near day 「まだ朝ではないわ」
- 3 **That pierced the fearful hollow of thine ear** 「あなたの耳の怯えた穴を貫いたのは…」 it…that の強調文です。
- 6 **The herald of the morn** 「朝の使者」
- 7- **what envious streaks ... east** 「どのような意地悪な光の筋が、あちらの東で、切れ切れの雲を縁取っているか、愛する人よ、見てごらん」が直訳。
- 9 **Night's candles are burnt out** 「夜の燈火が燃え尽きた」
jocund day Stands ... tops 「楽しい日が霧のかかった山頂に爪先立っている」
- 11 **I must ... die** 「立ち去って生きるか、留まって死ぬかだ」

(3) 最後の両家の和解の場です。

MONTAGUE But I can give thee more:

For I will raise her statue in pure gold;
That while Verona by that name is known,
There shall no figure at such rate be set
As that of true and faithful Juliet.

5

CAPULET As rich shall Romeo's by his lady's lie;
Poor sacrifices of our enmity!

PRINCE A glooming peace this morning with it brings;

The sun, for sorrow, will not show his head:
Go hence, to have more talk of these sad things;
Some shall be pardon'd, and some punished:
For never was a story of more woe
Than this of Juliet and her Romeo. (V-3)

10

Notes ●●●●●

- 2 **raise her statue in pure gold** 「純金のジュリエット像を建造します」
- 3 **That** 「純金なのは以下の目的があつてのことです」現在なら so that です。
while Verona ... known 町の歴史が続く限り、ということ。
- 4- **at such rate be set** このような高級な程度で建てるのは、ということです。
There shall no figure ... Juliet 「誠実で貞節なジュリエット像よりも立派な像は建たないでしょう」語り手の意志を示す shall です。
- 6 **As rich ... lie** 「それに負けぬ立派なロミオ像がその妻のそばに建つ」こども語り手の意志を示す shall です。
- 7 **Poor sacrifices of our enmity** 「両家の争いの気の毒な犠牲だ」
- 8 **A glooming ...** 主語は morning で、brings の目的語が peace です。
- 11 **Some shall ... punished** 「許される者もあろうし、罰される者もあろうぞ」権力者の命令口調の一種です。
- 12- **For never ... Romeo** 「なぜならば、ジュリエットとそのロミオの物語より悲しい物語は存在しなかったからだ」